

# 第152回～第177回

## ☆放送局及び期間☆

放送局	期間
ラジオ関東	昭和46年10月～47年3月
中部日本放送	昭和46年10月～47年3月
近畿放送	昭和46年10月～47年3月
RKB毎日放送	昭和46年10月～47年4月

RKB毎日放送は第177回を4月1日に放送

司会：宇井昇

## ☆放送リスト凡例

- |             |       |
|-------------|-------|
| ①サブタイトル・放送回 | ②出演者  |
| ③曲目         | ④放送概要 |

・年月日は、4局の中で一番放送日時が早いラジオ関東の放送日を記載。

・「①サブタイトル」は木村孝雄自費制作LP同封③に準拠。

・「②出演者」にはスタジオへの出演者のみを記し、電話での出演者は「④放送概要」に記述。

・「③曲目」は中日新聞及び京都新聞のラジオ欄の記述を元にした。そのため、放送されたすべての曲目を網羅しているわけではない。また、放送された音源の歌唱者が明示されている場合のみ、括弧書きで歌唱者名を付した。

・「④放送概要」は中日新聞及び京都新聞のラジオ欄の記述を元にした。

昭和46年10月3日

- ①松原操(ミス・コロムビア) #152
- ②松原操、高橋軍一
- ③「十九の春」「秋の銀座」「並木の雨」「真白き富士の嶺」
- ④ よそおいを新たにスタートするこの番組、今夜から3週にわたって、ミス・コロムビア(松原操)の特集でヒット曲の織りなす人間模様を探る。

昭和8年、ビクターに大きく水をあけられたコロムビアが新人歌手の発掘に躍起となっていた時、目をつけたのが上野の音楽学校出身の松原操。コロムビアでは本名をかくし覆面歌手としてデビューさせ、「十九の春」ほかが大ヒットする。

今夜は、デビュー当時のエピソードを中心に初期のヒット曲を聞く。

ゲストの高橋軍一は元コロムビア文芸部長。

10月10日

- ①松原操(ミス・コロムビア) #153
- ②松原操、霧島昇、竹岡信幸
- ③「旅の夜風」「悲しき子守唄」
- ④ 昭和12年の末から13年にかけては日支事変の影響でレコード界は低迷を続けていたが、これを一気に吹き飛ばしたのはミス・コロムビア(松原操)と霧島昇が組んで歌った「旅の夜風」の大ヒット。映画「愛染かつら」の主題歌だ。また、「旅の夜風」のB面「悲しき子守唄」は、映画の中で田中絹代扮する高石かつ枝の吹き替えとしてミス・コロムビアが歌ったもので、これが日本映画史上、吹き替えの第一号となる。

今夜はスタジオに霧島昇、松原操夫妻と作曲家の竹岡信幸を招き、「愛染かつらシリーズ」を原盤のSPレコードで聞きながら裏話を聞く。

10月17日

- ①松原操(ミス・コロムビア) #154
- ②松原操、霧島昇
- ③「愛染夜曲」「愛馬花嫁」「三百六十五夜」
- ④ 昭和13年、川口松太郎原作の「愛染かつら」の大ヒットに続き「続愛染かつら」が霧島昇、ミス・コロムビアの鴛鴦コンビで大ヒット。更に第三部「愛染かつら完結編」の主題歌「愛染草紙」も大ヒット。

昭和15年、松竹の「愛染かつら」に対抗して東宝が小島政二郎原作「新妻鏡」を映画化、主題歌「目も無い千鳥」に、この鴛鴦コンビを起用して大ヒット。

戦後の昭和23年、新東宝「三百六十五夜」も主題歌にこの2人を起用して大ヒット。霧島昇、松原操は映画主題歌になくはならない存在となるが、松原操は「三百六十五夜」を最後に引退、家庭の人となる。

今夜はスタジオに霧島昇、松原操夫妻を招いて、大ヒット誕生の裏話を聞く。

10月24日

- ①音丸 #155
- ②音丸
- ③「君は満州」「船頭可愛いや」「花嫁行進曲」
- ④ 今夜から3週にわたって音丸の特集。

昭和8年から9年にかけて、日本の歌謡界は勝太郎、市丸、小梅のヒットに刺激されて、鶯芸者のスカウトに狂奔したが、昭和9年の秋、凶らずも東京の家庭の主婦・永井満津子が美声を認められてレコード界入り、新聞の社会面を賑わした。芸名も芸者風に音丸。

「おけさくづし」「主は国境」でヒット、昭和10年、「船頭可愛いや」の大ヒットで文字通り音丸時代を築いたが、今夜はスタジオに音丸を迎え、やはり「船頭可愛いや」の作曲で一躍新進作曲家となった古関裕而との電話対談を交えながら初期のヒット曲をオリジナルのSP盤で聞く。

10月31日

- ①音丸 #156
- ②音丸

③「満州想えば」「下田夜曲」「大島くづし」「博多夜船」

④ 昭和10年、「船頭可愛いや」のヒットでコロムビアは音丸時代が続き、満州ものの軍国調歌謡でも売り出したが、彼女の本領はやはり「下田夜曲」「博多夜船」といった船もので開花する。

今でこそ、素人のど自慢は常識となったが、昭和11年3月「下田夜曲」を課題曲に、コロムビアと、映画化した松竹が共同で企画した歌謡コンクールが日本の素人のど自慢のはしりで、この時、後の岡晴夫や近江俊郎は落選したが、仙台出身の青葉笙子が優勝した。

今夜もスタジオに音丸を迎え、青葉笙子との電話対談を交えながら、全盛時代のヒット曲を原盤のSPレコードで聞く。

11月7日

- ①音丸 #157
- ②音丸

③「満州吹雪」「君は戦線」「夜船の夢」「軍国の母」

④ 音丸特集の3回目。

音丸のヒット曲を大別すると、「船頭可愛いや」「下田夜曲」「博多夜船」の船もの三部作と、「君は満州」「満州想えば」「満州吹雪」の満州もの三部作になるが、ヒット曲の大半は高橋掬太郎の作詞で、作曲を江口夜詩、竹岡信幸、古関裕而、大村能章が分担というケースが多い。

スタジオに音丸を迎え、今は亡き高橋掬太郎、大村能章に思いを馳せながら、楽譜も読めない下駄屋のおかみさんがいかに努力しながら歌手音丸として大成したかの人間模様を紐解く。

11月14日

- ①灰田勝彦 #158

②灰田勝彦、佐伯孝夫

③「雨の酒場」「燦めく星座」「森の小径」「マニラの街角で」「ジャワのマンゴ売り」

④ 今夜から3週にわたって灰勝こと灰田勝彦特集を送る。

ハワイ生まれの江戸っ子、青春歌手と言われる灰田勝彦が「ハワイのセレナーデ」でデビューしたのが昭和11年4月。その後12年6月には「雨の酒場」を歌い、そして15年3月に歌った「燦めく星座」で一躍トップスターの座を占めた。

今夜はスタジオに灰田勝彦と詩人の佐伯孝夫を迎えて、灰勝の歌をたっぷり聞きながら、数々の裏話を聞く。

11月21日

- ①灰田勝彦 #159

②灰田勝彦、佐伯孝夫

③「新雪」「ラバウル海軍航空隊」

④ 昭和17年8月、戦局いよいよ激しい中で、軽快な灰田勝彦の映画「新雪」主題歌が、国民に淡い希望と夢を与えた。しかし、軍歌を歌わない彼に対する軍部の風当たりは強く、「燦めく星座」にも、「陸軍の象徴である星を流行歌に歌っている」とクレームをつける始末だった。灰田が初めて歌った軍国歌謡は「加藤部隊歌」。

今夜はスタジオに灰田勝彦と詩人の佐伯孝夫を招き、暗い戦時中の苦悩を中心にヒット曲を当時の原盤のSPレコードで聞く。

11月28日

①灰田勝彦 #160

②灰田勝彦、佐伯孝夫

③「紫のタンゴ」「東京よさよなら」「東京の屋根の下」「アルプスの牧場」「野球小僧」「水色のスーツケース」

④ 今夜はハワイ生まれの江戸っ子、青春の歌手、灰田勝彦特集のその3で、灰勝の戦後版として、昭和22年4月に発売された「紫のタンゴ」から戦後のヒット曲を綴る。

灰田勝彦は、青春の歌い手であった。彼ほど、青春の喜びや悲しみを歌い上げた歌手は少ない。

戦後の吹き込み第一号は、昭和22年4月の「紫のタンゴ」である。空腹とカストリの渦巻くヤミ市に、若々しい青春賛歌が流れ、「東京よさよなら」「東京の屋根の下」は、日比谷・上野・銀座と、焼け跡から立ち上がる東京の顔を歌って大ヒット。

終戦後の荒廃した東京で、昔の良かったところも歌詞に織り込んだ「東京の屋根の下」、もし野球をやっていたら今ごろはジャイアンツの監督になっていただろうと語る野球好きの灰勝の「野球小僧」など、それぞれのヒット曲の裏話を、灰田勝彦と詩人の佐伯孝夫をゲストに宇井昇の司会で送る。

12月5日

①ポリドール戦前篇 #161

②藤田まさと、佐々木幸男

③「酋長の娘」「街の流れ鳥」「丹下左膳の唄」「あやめの唄」「エノケンのダイナ」「暗い日曜日」「人生航海」

④ 最近、なつメロファンの中で、ポリドールブームが起こりつつある。今月15日に、昭和5年から26年までのオリジナル原盤140曲によるポリドール歌謡大全集「心に生きるなつかしの歌声」のアルバムが発売されることになったが、今夜から2週にわたって、この大全集を取り上げる。

スタジオに当時のポリドール文芸部員・藤田まさと(現・作詞家)を迎え、初期のヒット曲誕生の裏話を聞く。

なお、このアルバムを聴取者にプレゼントをするお知らせもある。

この回及び翌第162回の放送日の中日新聞・京都新聞の紹介記事には佐々木幸男の名はないが、木村孝雄自費制作LP同封③には記されている。おそらく、「心に生きるなつかしの歌声」のアルバム制作に携わったポリドールのディレクターであろう。

12月12日

①ポリドール戦前篇 #162

②藤田まさと、佐々木幸男

③「勇士の誓い」「出船の唄」「大陸の町」「梅と兵隊」「男の夜曲」

④ 前週に引き続き、近く発売される「ポリドール歌謡大全集」を取り上げる。「古い奴だと思いでしょが、古い奴ほど新しいものを欲しがるのでございます…」鶴田浩二の「傷だらけの人生」や「男」が大ヒットしているが、その発想の根源は昭和10年、藤田まさと作詞の「旅笠道中」にさかのぼるといふ。

鶴田は昭和26年にデビュー盤「男の夜曲」を出しており、今をときめく「傷だらけの人生」とは多少イメージの違いはあるものの、この時既に「男っぽさ」を売り物にしている。

今夜もスタジオに藤田まさとを迎え、ポリドールがビクター、コロムビアに対抗して「股旅もの」路線で成功した裏話を聞きながらヒット曲をオリジナル原盤のSPレコードで聞く。

12月19日

①清水みのる #163

②清水みのる

③「野末の戦友」「島の船唄」「旅のつばくろ」「心のふるさと」「別れ船」

④ 今夜から2回にわたって、このほど紫綬褒章を受章した作詞家・清水みのるの特集を送る。

昭和9年「明治キャラメル之歌」の懸賞募集に見事一等入選したことで、作詞家清水みのるが誕生する。

そして昭和14年6月「島の船唄」の大ヒットは将来幾多の「船もの」を生み出していく「造船トリオ」一作詞清水みのる、作曲倉若晴生、歌手田端義夫一の一スタートとなる。

今夜はスタジオに清水みのるを迎え「紫綬褒章受章記念パーティー」の実況録音を織り込みながら、初期のヒット曲をオリジナル原盤のSPレコードで聞く。

12月26日

①清水みのる #164

②清水みのる

③「只今帰って参りました」「かえり船」「星の流れに」「かよい船」

④ 去る12月4日、東京ヒルトンホテルで行われた”紫綬褒章受章記念・清水みのるを祝う会”は各界諸氏の奇抜なあいさつや祝辞で話題を呼んだが、特に清水みのるの師匠サトウハチローの「清水みのる夫人に捧げる詩」は出色の出来で、サトウハチロー自身の朗読で満場の涙を誘った。

今夜はスタジオに清水みのるを迎え、このパーティーでの田端義夫の声などの実況録音を織り込みながら、清水みのるのヒット作の戦後版をオリジナル原盤のSPレコードで聞く。

昭和47年1月2日

①東海林太郎 #165

②東海林太郎

③「恋の鳥」「旅で暮らせば」

④ 3回にわたって、74歳の初春を迎えた東海林太郎の特集。

東海林太郎は昭和8年、キングからデビュー。その後、ポリドール、テイチクで大ヒットを飛ばしたが、彼が荘司史郎と名前を変えて、コロムビアで歌ったことはあまり知られていない。

今夜は東海林太郎をゲストに、大ヒットの陰で日の目を見なかった芸術的歌謡を中心に、珍品のSPレコードを聞きながら、その青春と芸術の歴史を披瀝する。

1月9日

①東海林太郎 #166

②東海林太郎

③「南国の夜」「さすらいの恋歌」「お柳恋しや」「お夏清十郎」

④ 東海林太郎特集その2。東海林は、昭和8年から11年までの3年間、キングとポリドールに日本レコード史上初のジョイント契約をし、両レコードからヒット曲を出した。

しかし、キングものとポリドールものとは、その歌唱が全く違い、これが同一人物の声かとファンをびっくりさせた。

これはキングの抒情的歌謡とポリドールの股旅もの歌謡という対照的な曲調を東海林太郎の高度な歌唱力と感情で歌い分けたもので、独自の表現現象と言える。

今夜はスタジオに東海林太郎を迎え、このキングものとポリドールものを聞き比べながら歌唱の秘密を探る。

1月16日

①東海林太郎 #167

②東海林太郎

③「日暮の馬車」「黄昏道中」「ハルビン旅愁」「涯なき南海」「或る少尉の遺書」

④ 歌謡曲とは三分間芸術である。この三分間に作詞者と作曲家がストーリーを忠実に描写し、自らの幻想とリズムの中に沈潜していく。

そして歌手は詩曲の心の琴線を精魂を打ち込み繊細に表現することにより名曲が誕生する。

今夜はスタジオに東海林太郎を迎え、東海林太郎が歌詩をもらってからマイクに向かうまでの過程を実例をもって分析していく。

1月23日

①リクエスト1 #168

②

③「涙の三人旅」「長崎物語」、淡谷のり子の歌

④ なつメロ・リクエスト特集。

なつメロファンにも色々あるが、アメリカのプリンストン大学に留学中にアメリカ人と結婚した由美子・M・ウォーレン(32歳)の場合は珍しい。

彼女は日本にいた時歌謡曲を好まなかったが、プリンストン大学の研究所はその昔、湯川秀樹博士が”愛染かつら”の主題歌「旅の夜風」を口ずさみながら研究したと言われ、それ以来日本人研究員はなつメロを歌いながら勉強をする風習があり、歌謡曲を軽蔑していた彼女がアメリカへ勉強しに行き日本になつメロファンになって帰国したという。

今夜はこのウォーレン夫人をはじめ、聴取者と電話で話をしながらリクエスト曲をオリジナル原盤のSPレコードで聞く。

1月30日

①リクエスト2 #169

②

③「ブエノス・アイレスの唄」(淡谷のり子)、「月のデッキで」(霧島昇)、渡辺はま子の歌

④

2月6日

①岡晴夫 #170

②山口俊郎

③「国境の春」「上海の花売り娘」「啼くな小鳩よ」「港シャンソン」

④ 今夜から2回にわたって、今は亡き岡晴夫を偲んでの特集。

岡晴夫なくしては、戦後の日本歌謡史を語ることはできない。昭和21年から6年間は日本一の歌手としてレコード界に君臨した。

今夜はスタジオに当時、キングオーケストラを指揮していた作曲家・山口俊郎を迎え、ファンの電話リクエストに応えながら、岡晴夫の隠れた横顔を偲ぶ。

2月13日

①岡晴夫 #171

②山口俊郎

③「グッドバイ東京」「東京の花売り娘」「あこがれのハワイ航路」「男の涙」「アンコ可愛いや」

④ 今夜は電話リクエストに応えての岡晴夫特集第2回。岡晴夫は昭和45年5月19日、54歳でこの世を去ったが、現在でもファンの心の中に生きている。

本名佐々木辰男。大正5年、千葉県木更津の生まれ、レコード界に入る前は東京上野の松坂屋の店員だったが、歌が好きで地方巡りのアトラクションで舞台に立ち、たまたま長野県を巡業中に上原げんと知り合うが、これが2人を結びつける最初の絆となる。

昭和21年、ブギ調の「東京の花売り娘」が大ヒットした。その結果、岡晴夫のリーゼントスタイル、進駐軍払い下げの粋な皮ジャンパーという”岡晴スタイル”が、あっという間に全国の若者の間に流行した。

今夜はスタジオに当時の仲間であり、キングオーケストラで指揮をしていた作曲家の山口俊郎を迎え、岡・上原コンビの秘話を中心に岡晴夫の人気の根源を探る。

2月20日

## ①リクエスト3 #172

②

③「流れの船唄」(竹山逸郎)、「何日君再来」(松平晃)、「男の純情」(藤山一郎)、「黒いパイプ」(由利あけみ)、「女の階級」(楠木繁夫)、「潮来夜舟」(北廉太郎)、「初旅ごよみ」(田端義夫)

④ 諸般の事情から吹込み後、発売されなかったなつメロ”幻のレコード”のリクエスト特集。

一曲目竹山逸郎の「流れの船唄」を聞いた後、中国の歌を訳して歌ったはしりとも言える松平晃の「何日君再来」をテスト盤で聞く。

この他珍品中の珍品と言えるナレーション入りのレコード「唄の慰問袋」より、藤山一郎の「男の純情」、由利あけみの「黒いパイプ」、楠木繁夫の「女の階級」、そして静田金波のナレーションを送る。

2月27日

## ①リクエスト4 #173

②

③「港が見える丘」(平野愛子)、「緑の地平線」(楠木繁夫)、「九段の母」(塩まさる)、「千曲流れて」(青葉笙子)、「女給の唄」(羽衣歌子)

④ 聴取者のリクエストを中心に番組を構成する。

一曲目は昭和22年発売の平野愛子の「港が見える丘」。そして京都のなつメロ同好会の紹介の後、楠木繁夫の「緑の地平線」。最近リクエストが多くなってきた戦時歌謡の中から「九段の母」、続いて青葉笙子の珍しいレコード「千曲流れて」の後、今年70歳になるという羽衣歌子と電話で話した後「女給の唄」を聞く。

昭和6年、婦人雑誌に連載された広津和郎の「女給」という小説が評判になった。カフェ全盛時代のことである。それを西城八十が作詞して「女給の唄」ができた。

このレコードは、同じメロディーを歌詞だけ変えて、A面(歌・羽衣歌子)、B面(藤本二三吉)に入れるという珍品であった。

最後に今夜最高の聞きもの、羽衣歌子の生の歌声を電話を通じて聞く。

3月5日

## ①リクエスト5 #174

②

③「船頭可愛いや」(三浦環)、「満洲想えば」(音丸)、「慈悲心鳥」(楠木繁夫)、「浅間日暮れて」(三門順子)、「別れ船」(田端義夫)

④ 今夜も聴取者の希望に応じてのリクエスト特集。

「生後間もなく母と離別し、母は私を父方の祖父母に託して単身、吹雪の満州へ行ったと聞かされています。あれから三十五年。音丸さんの「満洲想えば」を聞くたびに傷心を抱いて渡満した母の気持ちがしのばれます。もしかしたら、健在で、どこかの空の下で、この曲を聞いているかも知れません」(原文のまま)三重県の主婦、奥寿江さんはこう書いている。

今夜はお便りを紹介しながらリクエスト曲をかける。

3月12日

## ①リクエスト6 #175

②大木惇夫

③「希望の首途」(松平晃)、「青い牧場」(藤山一郎・奈良光枝)、「国境線万里」(上原敏)、「国境の町」(東海林太郎)

④ 聴取者のリクエストに応じて、昭和9年に大ヒットした「国境の町」(歌・東海林太郎)の作詞家、純粹詩人の大木惇夫に「国境の町」誕生の秘話を聞く。北原白秋ゆずりの酒豪だった大木惇夫も今年77歳になり、自作の「国境線万里」「国境の町」を聞いて涙する。

3月19日

①リクエスト7 #176

②橋本一郎

③「高原の旅愁」(伊藤久男)、「軍靴千里」(橋本一郎)、「追分道中」

④ 橋本一郎という歌手は一体誰だったのか? 現在、全国なつメロ・ファンの間で、歌手・橋本一郎に対する論議がやかましい。橋本一郎の本名は岡大作。

昭和10年、キングから橋本一郎でデビュー。タイヘイに移っても橋本一郎で歌ったが、昭和11年ポリドールに移って河崎一郎と改名。昭和12年再びタイヘイに戻って一条弘となり、更にまた橋本一郎も名乗ったのが混乱の原因となった。各社でヒット曲を出したが、名前が色々あるのでイメージが分散、大スターになれなかったのが惜しい。

今夜は聴取者の疑問に本人から改名のいきさつを応える。

3月26日

①リクエスト8 #177

②島田馨也

③「裏町人生」、「可愛いリラ」(楠木繁夫)、「白虎隊」(藤山一郎)、「湖底の故郷」、「人生航海」、

「小夜の中山」(青葉笙子)」

④ 昭和43年11月にスタートしたこの番組も、今夜で一応終わる。

最終回を記念して、昭和43年11月の第1回放送にゲスト出演した人生詩人・島田馨也を再びスタジオに迎え、また番組のファンも交えていろいろな思い出を話しながら進めていく。

一曲目は、第1回放送の最初の曲「裏町人生」、そして楠木繁夫の「可愛いリラ」と続く。

今夜はゲストの島田馨也作詩の曲ばかりを聞く。

放送当日の京都新聞朝刊には、「なお来週からは再放送の形でお送りする。」と記述されている。